

## コラム 35—南京事件

暴徒と化した北伐軍が、外国領事館、工場、住宅を襲撃、これに対し列国の軍艦は砲撃し、日本軍の共同出兵を依頼すべく、英国は大使を幣原外相（写真）に訪問させましたが、日本は英米と共同歩調とらず、日本の軍艦は居留民を見捨てることとなります。南京に入城したのは、程潜の第6軍でその政治主任が共産党の林祖涵、林は漢口にいるソ連のボロディンから、南京において列国の間に事を起こせとの指令を受けていました。



幣原喜重郎外相

この事件で、日本人1名、外国人6名が死亡したほか、日本領事館を襲撃した北伐軍は、領事夫人をはじめそこにいた婦女子を陵辱し、手当たり次第に略奪しました。軍艦から陸戦隊として派遣された荒木大尉は、日本側の方針により、無抵抗主義をとったが、艦に帰ってから責任を取って、自殺を図りました。

この幣原外交の及ぼした影響は、「中国人に日本人は少しあばれると、逃げていくという対日侮日感情を生じさせるとともに、英米には、日本は中国と組んで、英米の権益を中国から追い出し、日本が独占しようとしているのではないかという疑心を持たれ、英国は対中宥和政策に大転換し、中国人の矛先を日本に向ける」という負の結果を生むことになりました。幣原外相は、加藤内閣（1924.4～1927.4）と浜口内閣（1929.7～1931.7）で2回外相を務め、対中国外交四原則（①中国の内政に関する不干渉、②中国における合理的権益の合理的擁護、③中国の現状に対する同情と寛容な態度。④中国との経済提携による日中両国の共存共栄）を堅持します。日本は、この四原則をかたくなに貫くことにより、中国人の対日侮日感情をさらに助長することになり、満州をはじめとする中国在留邦人の立場を益々苦しいものとしていったのです。